

屋敷林のフォークロア 一人との関わりから見えてくるもの

赤坂 憲雄 (東北芸術工科大学東北文化研究センター)

990-2420 山形市上桜田 200

Folklore on Yashiki-rin —Thinking from people-plant relationships—

Norio AKASAKA

Tohoku Culture Research Center, Tohoku University of Art and Design
200 Kamisakurada, Yamagata, Yamagata 991-2420

【屋敷林のある風景】

はじめに民俗学者から見た風景についてお話しします。柳田国男はあるエッセイの中で「風景を植える」と言っています。風景は人間が種をまき、水をやり、育てるものだという考え方です。「風景を植える」、これはとても詩的な表現です。それに対して、戦後の宮本常一という民俗学者は、それをより直接的に「風景は人がつくるものである」と言い切りました。

僕の生まれ育った武蔵野周辺は、江戸時代には土埃が舞う、作物を植えることもできない、家を建てても朝起きると顔じゅうに土がかぶっているというような土地でした。そこに人々が暮らし、農業を営むようになった。多摩川上水などの水路がいろいろな形で張りめぐらされ、ケヤキの並木やお茶の生け垣が家々の周りにある。屋敷林は「山」と呼ばれ、どこの旧家にもありました。僕の生まれ育った周りには、そういう武蔵野の風景がりましたが、宮本さんはその武蔵野の風景はすべて人がつくったものだと切り切っているのです。正しいのだろうと思います。

屋敷林のある風景ということが今日のテーマです。誰がどのように屋敷林をつくったのか。人と自然との関わりというものを支えている技術というものがあるのではないかと。具体的に踏み込むことはできないが、屋敷林という人間の身近な風景をつくるために、何が自然から導入され、人と自然との関わりをどのように加工してデザインしたのかといった問いかけが、僕の中にずっとありました。屋敷林の問題を考えることは、おそらく里山について考えることであり、さらにはその奥に広がっている奥山の自然について考えることにもつながっているのではないかと。屋敷林から里山へ、奥山へという、その眼差しをおそらく歴史の中では逆に奥山から里山へ、里山から屋敷林へというように眼差しが降ろされていったのだろうと考えています。

2006年4月30日受付。

本報は2005年6月4日に山形県鶴岡市の出羽庄内国際村で鶴岡致道大学、人間・植物関係学会および東北芸術工科大学東北文化研究センターとの共催で行われた講演の内容である。鶴岡致道大学および著者の許可を得て、「鶴岡致道大学平成17年度講義記録」から一部修正のうえ転載した。

す。

屋敷林は、東北の村や町の歴史を考えるとときにとても大きな手がかりになると感じています。例えば「背戸の山と前の畑」という言葉があります。前の畑は、屋敷の前の野菜や雑穀をつくる畑のことです。そして、屋敷の後ろ側には背戸の山があるというのです。けれども、平野部ですから山らしい山があるわけではありません。その山とは森を指しているのです。少し高いところから見ると、平野部に屋敷林に囲われた農家が点在している美しい風景がありますが、その中に暮らす人たちが背戸の山と前の畑がなければ自分たちの暮らしは成り立たないというような認識を持っていたらしいのです。つまり平野部で稲作を中心とした農業を行う百姓たちが、屋敷や集落の裏山としての背戸の山、そして屋敷の前に広がる雑穀や野菜をつくる前の畑を最も大切にしてきた。そうした歴史が背戸の山と前の畑という言葉には込められているのだと思います。なぜ背戸の山が大切なのか、なぜ別の地方では裏の山、裏山と呼ばれるのか。こうした問いを起点として、東北の村やそこに暮らす人々の歴史を解きほぐすことができるのではないかとこの予感を抱えてきたのです。

【屋敷林の機能】

屋敷林は多様な機能や用途を持っています。少なくとも七つぐらいの機能があると考えます。一つ目は、屋敷地の内と外を分かつ境界としての機能。二つ目が防風、防火、防水、防砂、いわば自然災害や火事などの人為的な災害も含めて屋敷を守るための機能。屋敷林というとほとんどが防風林として風よけの話ばかりされていますが、民俗学者の目から見ると屋敷林の姿というのはとてもそういうところに限定することはできません。三番目に燃料とする薪や炭を焼くための用材を採取する。四番目に家屋の寿命が来たときに建て替えるための建築用材としてであり、そのために杉などの建築用材を50年、100年単位で育てている。五番目がしばしば見られる竹林で、竹という素材を様々な生活に使うために確保する。それからタケノコがとれる。ついでにキノコなんかも採るといった機能も託

されている土地もある。六番目が果物の木を植えて果実を取る。七番目が田んぼに敷く刈り敷き、あるいは肥料にするための落ち葉などを利用するといったとても重要な役割があります。

少なくとも今挙げた七つの役割は、屋敷林を考えるときに常に頭に置かなくてはならない。ところが、現実には防風林という面だけが強調されることが多かったのです。それは例えばガスや石油、電気が普及し、燃料にする薪を必要としなくなると、屋敷林の持っていた機能の一つが忘れられていくように、多様な機能がだんだんと失われていき、防風林としての役割だけが突出して残ったということなのでしょう。いずれにしても屋敷林は大変多様な用途を持っていて、その用途に応じて多様な樹種の木々が植えられていたのです。そこにはその土地の人々の暮らしに関わる思いや知恵や技術などが秘められているはずです。

実は先ほどの背戸の山、裏山は、平野部に進出した稲作農民たちが必要とした里山の機能の代替物だったのではないかと僕は思っています。

【聞き書き調査で】

2003年の11月に山形大学農学部と東北芸術工科大学とが合同で、藤島町(現・鶴岡市)上新田で簡単な聞き書き調査を行いました。庄内平野には京田、興屋、新田という地名が非常にたくさんあります。これは、中世の末期から近世にかけてあって3回の大きな新田開発の名残りです。この地名の向こうには庄内平野の歴史が見え隠れしています。上新田も新田開発によって生まれた村ですが、そこは屋敷林が大変美しい景観を形作っています。30年ほど前と比べると、既に屋敷林の木は50%ぐらいまで減ってはいるがまだ残っています。庄内平野の屋敷林の特徴は、一つ一つの屋敷林が孤立している大崎平野などとは異なり、屋敷林が隣とつながり細長く連なって集落を形成しているということです。

上新田に住む富樫さんのお宅を訪ねると、庭に樹齢350年といわれる大きなケヤキの木がありました。富樫家の先祖がこの地にやってきて暮らし始めたときに植えたものだと言われていて、富樫家の守り神でもある木です。上新田の八幡神社はうっそうとした森になっていて、今から10年前に350年祭を行ったとお聞きました。おそらく350年ぐらい前、1600年代の前半にこの村は作られたのだと思われます。富樫さんは14代目にあたり、新潟からこの地に辿り着いたとのこと。ここでは、生け垣を久根と呼びます。垣根とか久根という言葉はよく出てきます。しかし、この地域には屋敷林そのものを指す名称は存在しません。また、背戸の山、裏の山といった名前も聞かれませんでした。屋敷林を指す名称は、『図説民俗建築大辞典』にいろいろと出ています。久根、居久根という

言葉はとりわけ宮城、福島、山形、静岡あたりに出てくるのでよく知られています。富山市付近では、垣鳩とか垣入鳥という言葉が多いです。

富樫さんのお宅は、この350年のケヤキの木をはじめとしてうっそうとした樹木が繁茂していて、それが防風林になっているということは明らかでした。それから竹やぶがあり、タケノコを採るとも聞きました。境界には杉を植えて、昔はそれを建築の用材にしたものだと聞きました。庭の至るところにカキ、スモモ、カリン、イチジクなどの果樹が植えられていました。イチジクは流しの水がしみ出してきて少し湿っているあたりに植えるというようなことも聞きました。つまりその屋敷地の中の暮らしとの関わりの中で、1本1本の木をどのように植え、育てるかということを実は極めて周到に計算し尽くして植えられていたのではないかと。けれども、このような屋敷林との関係の大半が消えてしまっているのだから、そこまでの聞き書きは残念ながらできませんでした。

屋敷墓は、この上新田には無く、寺の境内にまともまっています。僕が大変関心を持った一つの話があります。屋敷地の北西の一角に茂みがあって、そこを「山坪」と呼んでいるということです。

庄内では、建物に囲まれた庭を坪というかと教えられました。そして、その坪に山をつけて山坪という。なぜそこに山が出てくるのか。その山はもしかしたら大崎平野などで聞く背戸の山につながっているのではないかとそんな予感を感じました。富樫家の山坪のあたりには、朽ちかけた稲荷のお社がありました。中を覗いて見ると、古い棟札が3枚ほどあって、昔は大切にされていた氏神、家の神様なのだろうと思います。ここで関心をそそられたのは、この山坪、稲荷の社がある場所に生えていた木です。ヤブツバキとシキミは常緑で神様の宿り木とかお祭りなどに使う木でもあります。そして、もう一つ僕が気になったのは2本のタブの木です。実はタブには酒田の飛鳥で出会っています。飛鳥にはタブの群生林が5,6か所ありますが、すべて神社の周りにあるのです。タブの森は神社と非常に強いつながりを持って守られてきているという印象があったので、タブがあるということがとても気になりました。これは単なる偶然ではなく、富樫家の人々が選択して、いわば山坪を小さな照葉樹林のようにデザインしているということではないかと考えたときに、そこには深い歴史が隠されているのかもしれないと思ったのです。

上新田では、もう一軒、板垣さんという旧家を訪ねました。ここでも幾つかのことをお聞きしました。隣の家との境界は、境界から1m離して久根をつくる。その久根には防風を兼ねて、ここではサワラと言っていますがアスナロの木を植えます。屋敷の周りはサワラの久根になっていると言っていました。ただ昭和

62年に50本ほどのアスナロを建築用材として伐採したので、我々が訪ねたときには周りにはそんな豊かな屋敷林、サワラ久根はありませんでした。季節風の来る方角には、はっきりとは確認していませんが、カクレミノ、ニシキギ、イチイ、ヒバといった木が植えられていて、屋敷地の中にはカキ、カリン、スモモ、イチジク、そしてマルメロなどの果樹が植えられていたと説明を受けています。薪材としては、サワラとか杉などの枝が重要だったとも言っていました。竹林があって、やはりタケノコを採っています。ツバキやサザンカ、サカキといった木は神棚で使うので大切だとも伺っています。そして、ここでも山坪という言葉が出てきました。屋敷地の片隅の小高い土が盛られたようなところ、その庭のあたりを山坪と称している。板垣さんからは「久根の中に坪があり、家がある」という言葉を教えていただきました。屋敷林の境界あたりにサワラ久根をつくり、その中に坪があり、家があるという感覚です。おそらくこれは庄内の新田開発の村では、ごく当たり前に聞かれる言葉なのだろうと思います。

【坪という言葉】

僕は山坪という言葉に大変関心をそそられました。それを何とか解きほぐしてみたいと思ったのですがなかなか容易にはできない。それで「坪」という言葉にこだわってみました。日本国語大辞典に坪について詳しい説明があります。大きくは、中庭、建物の間や垣根の内側などにある庭を指している、これが坪の一つの意味合いです。二つ目が面積などを表す単位です。坪です。それから、古代の条里制において土地の地割りの単位として、坪という言葉が使われたともあります。茨城、栃木、福島あたりでは、集落を坪と呼ぶ地域がありますが、おそらくこれとつながっているのだろうと思います。

それから、方言の中にあられる坪についても記載されています。そこに随分たくさん意味が並べられています。庭、庭園、中庭、内庭、裏庭、植え込み、築山、門から家までの広場、家のそばの空き地、境内、町村内の小区域、組、これは先ほどの茨城、栃木、福島あたりでの使われ方です。田舎、地方、市場に対して生産するところ、魚をいつも安く買うことになっているところ、商売人でない素人家のこと、土間、土間と板張りなどでできている部屋、もみを入れておく物置、穀倉、家の中で一番大切な部屋など。実にたくさんの意味を持った言葉だったのです。その中に坪山という方言が出てきますが東日本、特に山形、福島以北の東北に圧倒的に多い。つまり東日本の庭を指す方言であるということがとりあえず言えそうです。ついでに坪の内という言葉を見てみると、建物や塀で囲まれた狭い庭を意味していて、使われているのはや

はり東北、東日本が多いという印象があります。

柳田国男が監修した『総合日本民俗語彙』という辞典を見ると、坪木場と坪山という言葉があります。これは、もともと『居住習俗語彙』に載っていたものを集めたものですが、民俗学者が坪という問題をどういうふうに読み解いていくかという手がかりがここにあります。坪木場は「富士川右岸の村々などで家の表の庭の一区画をそういう。ツボキはそこに植えた木のことで、通例は山野から見立てて採ってくる」とありますが、ここに注目です。坪木というのは、坪庭に植えた木のことである。それは、通例は山野から見立ててとってくるというのです。「松の木が最も多い」ともあります。

つぎに坪山です。「静岡県その他で庭園を坪山、長野ではツボドコという」。地名にはあまりこだわる必要はないと思いますが、「庭のうちの植木のある区画で、これをツボニワ・ツボノウチ、または単に坪とも言っている土地は多い」。そして、福島県の会津地方には「坪山は神の出で遊ばれる清い所だから汚さぬようにするという風習があった」というのです。福島の研究者に確認しましたがよくわかりませんでした。とても気になります。藤島町上新田の富樫家、板垣家、新田の村の旧家の庭に坪山を逆さにした山坪という言葉があります。富樫家の場合、そこはとりわけお稲荷さんが祭られる、屋敷地の中でも特別に印づけられた場所という認識が見え隠れしています。そして、ヤブツバキ、シキミ、タブといった小さな照葉樹の森がそこにはデザインされている。それが偶然だとは僕には思えないのです。

坪というのは、日本文化の中では中庭という意味、面積をあらわす単位、それから条里制における土地の地割りの単位であると、その三つが突きとめられています。そして、我々にとって関心をそそられるのは中庭としての坪、庭であったり中庭であったり、裏庭、植え込み、築山、家の外の庭、とにかく屋敷地の中にある一角を坪と呼び、そしてその坪という言葉がどうやら東日本、とりわけ東北地方に濃密に分布している言葉であるということです。

また、山というのは東北ではとりわけ標高差のある土地の高いところではなく、樹木がこんもり茂るところを指す場合が多い。その山と坪とのかかわりというものをごどのように読み解くことができるのかは大変興味深い問題です。

【裏山について】

僕の友人で舞踊家であり芸工大の研究員でもある森繁哉さんが屋敷林について興味深い聞き書きをしています。

秋田県中仙町（現・大仙市）豊岡の旧家の母屋の東側に杉の木が林のように植えられている。将来家を建

てるときにこの杉を使うということです。その辺りには元々雑木が林立していたらしいが、三代目の先祖が雑木林を切り払って屋敷を囲うように杉を植えた。それを「久根っこ」と呼んでいる。しだれ桜が生えている場所を基点として、家の囲いの目印としてのイチヨウの木を要所、要所に植えて家の屋敷地を確定していったというのです。ここで重要なのは「囲う」という言葉です。囲い込む。平野部では山を背負っていないので、雑木林を囲い込むような形で屋敷を形成していった。それに対して、山村ではどうか。山形県大蔵村沼では、屋敷は皆「くぞ山」と呼ばれる里山の際に建てられて集落を形づくっている。家を構えるときに最も大切なことは、裏山からきれいな水を取り入れることができること。だから山の地形を見ながらなるべく山の際に家を建てる。本家と分家の関係では、本家が上に、分家はその下に家を建てていると僕は思っていました。ここでは分家は本家のさらに上の山側に家を建てるというのです。それは水の管理の問題で、分家が水管理の役割を担う。また、先ほどこいじくの木をわざわざ台所の流しの水のみ出す湿地帯に植えると紹介しましたが、流しの水は極めて栄養価の高い水だからであり、それが本家と分家の関係にもつながっているらしいのです。つまり分家と本家の台所からの水、大蔵村ではこれを「へなずり水」というらしいのですが、この水を自分の田に全部集めて流し込む。そうすると田んぼが栄養価の高い土壌になるということなのです。我々にとっては台所の水というのは汚れた、マイナスの意味しか持ちませんが、そのことも森さんは聞き書きしていました。

裏の山と呼んでいます。この裏の山は非常に密接な生活空間の一部です。家から近くて高いところを山というように呼んでいます。家の裏側にある山は日常的に使う山として、とりわけ大切にされた。必ず名前を付けて呼んでいます。この山では例えば夜のおかずに山菜が欲しいとなると、夕方暗くなる前に山に入って山菜を採ってくる。たくさん採って保存する必要がなく、必要になったら採りに行けばいい。燃料用の薪、農業用の資材、杭なども全部そこで調達する。もちろん水を取るのもそこです。

森さんは、先ほどの秋田の平野部と山形の山村の山との関係を「平野部は囲い込む、山村部は取り込む」と言っています。平野部には山がないので、樹木で屋敷林を形成して囲い込むようにして、かつて持っていた里山との関わりをそこに再現する。それに対して、山村では裏山の自然というものを取り込むようにして屋敷をつくっていく。その中間と思われるのが、森さんの報告では中仙町のある家で、そこでは裏山を在山と呼んでいます。その在山からいろいろな暮らしの、あるいはなりわいの素材を戴くのです。この話の語り部は、子供の頃はこんもりとした暗い林のように思わ

れた屋敷地の林は、在山と言われる裏山の木を移植したと言っています。杉を裏山からとってきているのです。これはとても重要なことで、山野から見立ててとってくるという言葉の背景につながっていくのだらうと思います。平野部では元々あった雑木林を取り込むような形で雑木林をつくったが、ここでは移植しているのです。山からは500mぐらいの距離があって、大蔵村のように山を背に集落がつけられていないので、移植するという形でそこに裏山を再現していくのです。

その屋敷林は風除けとしての役目を当然果たしているし、境界としての役目も果たす。そして、根が張ることによって屋敷地を固める役目も担っている。こういうところも大変大切なことです。久根と呼ばれる屋敷林、その外にはまた小さな森があり、それが村の森や林へつながっていくのかもしれませんが。そして、この屋敷林の木々の下生えの辺りには在山から採ってきたフキやミズなどの山菜も移し植えられているということです。つまり屋敷林の中には山菜を採る場所すらデザインされてつけられているということです。500mほどの距離はあるが山を背に屋敷を定めるということが行われている。山を背にした集落、山から少し離れたところの集落、平野部の農家。裏山の自然を取り込むようにつけられた山村。少し離れた所では木を移植して雑木林をつくっていき、さらに離れた所では元々あった雑木林を囲い込むようにして屋敷林を育てていく。そうした流れがあったのではないのでしょうか。

それから森さんは裏山について大蔵村で聞き書き調査を行っています。裏山のイメージを尋ねられた人たちが何と答えたか。裏山とは一体何なのか。ここでは、裏山という場所は自分の屋敷の一部であり最も身近な山である。そこは、山菜や野菜の鮮度を保つための貯蔵の場所。山菜をたくさん採ってきて保存する必要がない、食べるだけ採りに行けばいい。また、杭や農耕の道具の置き場所。山と言っても庭の一部のようなものであるといった感覚です。もちろん水をとる。水を引いて庭先の池に入れ、それは田んぼに落とされる。昔はみんな山に近づいて家を建てたいと思っていた。裏山がない家は大変不便だったというのです。これは、とても意味のあることだろうと思います。集落周辺の呼び名についても様々な呼び名があるのですが、その一つに裏山という言葉があって、そこから森さんは聞き書きを展開していったのです。裏山は、季節ごとの山菜やキノコを採取したり、あるいは栽培地としての機能を持っている場所。シイタケを原木栽培するのもこうした裏山であり、オウレンなどの薬草を栽培したり花も栽培する、栽培地としての機能も持っていたというのです。いわば人間の暮らす場所と自然との境界領域の利用の仕方の多様性ということ。裏山の一角の最もよい場所に杉の木を植え、農耕用の

用材を確保する場所でもあった。そして、落ち葉を集める、堆肥にする堆肥場の役目もこの裏山が果たしていた。ウサギやタヌキもやって来るので狩りもした。池をつくる、コイを飼う。そして、クリやカキの木を植える。

さらに、いろいろな役割をこの裏山は果たしています。雪国では消雪ということが大変重要ですが、裏山から引いた池が雪を溶かすための場になる。それから、カヤや草というものをとったり保存する場所、風よけや雪崩などの雪害を防ぐという意味もあった。いわば今僕が挙げてきた裏山の機能とか用途というのは、最初にお話した屋敷林の担っている役割、機能と大分重なっています。だからこそこうした里山を背にして暮らしを立てていた人たちが山から離れて平野部の新田開発の村に下りてきたときに、里山をどうしても必要としたのです。里山がなければ暮らしが成り立たない。それで彼らはそれを屋敷林という形で裏山の自然を移し変える。自然を山野から見立てて、屋敷林をそこにデザインしているのではないかと思います。裏山の木は、その土地の山に自生する木がよいと言われた。あるいは、屋敷林はできるだけ近くの山に似せろと言われた。屋敷林はできるだけ近くの山に似せろ、つまり屋敷林は人間のつくるものであるということをはっきり自覚している人たちがどのように屋敷林をつくるのか。それは近くの裏山、里山の自然景観というものを再現する形で、それに似せる形でつくる、デザインするという、そうした知恵がはつきりここには窺われるのではないかと思います。

【屋敷林のフォークロア】

『総合日本民俗語彙』に坪山に触れて、それは神が出て遊ばれる清いところだから汚さないという会津地方の言い伝えを採録していました。おそらくこの神は山の神だと思います。民俗の中では、例えば12月12

日が山の神が出て遊ぶ日であるから、山仕事は休んで決して山には入らないということがあります。坪山は屋敷の中のいわば山の神の清らかな祭りの場という意味合いを持っていたのかもしれないと感じさせられます。坪と山が結びつく坪山、あるいは庄内では山坪という言葉がある。そこからおそらくいろいろなものが見えてくるだろうと思います。山と中庭を指す坪が結びつく、屋敷の中に山を見立ててつくる、その山というのはおそらく高い修験の山ではないのです。暮らしの中で常に関わる身近な自然としての裏山であり、背戸の山であり、我々が今使っている言葉で言えば里山なのです。その里山との関係というものがもしかしたら庄内の屋敷の一角を指す山坪という言葉の向こうにも透けて見えるのかもしれない、そんな気がします。

武蔵野でも屋敷林は山と呼ばれていました。なぜ山と呼ばれるのか。おそらくそこには屋敷林の持っている里山的な役割というものが影を落としているのだろう。平野部の新田開発に従った人々はどこからやって来たのか。おそらく山を背にした土地から移って来ているのです。そうした人たちが近世の新田開発の中で、平野部で人間たちが稲作を行いながら暮らすことができるようになったときにはじめて進出してくる。その平野の中に家を建て、屋敷林は単に風除けではなく、里山が持っていた多様な用途や機能の全てが託されている。だからこそ実に多様な樹種の木々が選んで植えられていた。そういう屋敷林の姿は、人と自然、人と里山、人と森との関係ということを考えるときの大きな手がかりになると僕は感じます。

屋敷林のフォークロアの向こうには、そうした東北に生きた人々の語られることのない歴史といったものがきつと隠されている。それを読み解くためには、もっと詳細にその屋敷林を構成する樹種を特定し、その一つ一つの木とどのようにつき合ってきたのかといった聞き書きをぜひしてみたいと思います。